

## 「宝塚歌劇におけるフランスのイメージ

—『ベルサイユのばら』の成立をめぐる—

北村卓

宝塚歌劇の前身である宝塚少女歌劇が 1914 年に宝塚新温泉で産声を上げてから、100 周年を迎えようとしている。大正初期、阪神間郊外のひなびた温泉地に十数人の少女たちによって幕を開けた歌と踊りの見せ物が、長い時を経て少しずつ姿を変えながら、現在では日本を代表するスペクタクル・エンタテインメントにまで成長している。この間、宝塚歌劇は多くの海外公演を通して、そのときどきに求められる日本的イメージを外に向けて発信する一方、国内では、明治以降の西洋近代導入の流れのなかで「西洋」を時代の要請に合うようにアレンジして見せるいわばメディア装置としての役割を果たしてきた。なかでもフランスのイメージは『モン・パリ』(1927)の上演を機に、以後宝塚のアイデンティティを構成する重要な要素となる。そして一般の日本人が抱くフランスのステレオタイプ的なイメージを生成・強化し続けるとともに、それを宝塚独自のスタイルに変容させてきた。たとえば、本年 2 月の公演で観客動員数が 450 万人を突破したと報道された人気演目『ベルサイユのばら』(初演 1974 年)は、フランスを舞台にしながらも、現実のフランスとはきわめて異なるイメージ空間を創り上げている。本発表では、宝塚歌劇を日本の社会的・文化的文脈において捉えつつ、宝塚の「フランス・イメージ」がいかんにして創出され、変容を加えられて現代に至っているのか、その一端を明らかにしたい。